文化財愛護
シンボルマーク

郡家町文化財報告書24

鳥取県八頭郡郡家町

KUNŌJI ISEKI

久能寺遺跡

（試掘調査）

2001．2

郡家町教育委員会

序　　文

この発掘調査報告書は、平成12年の国庫補助事業として実施した本町内久能寺地区に所在する久能寺遺跡の試掘調査記録です。

郡家町には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加と共に発掘調査の必要性が高まっています。埋蔵文化財は、先人の残した文化遺産であり、地域の古代の生活を語る歴史資料として後世に残し伝えていくべき町民の貴重な財産です。

郡家町教育委員会では、このような認識にもとずき関係各機関と協議を重ね、また、地元町民のご理解をいただきながら地域の発展と文化財の共存を図るよう、文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度実施しました発掘調査も関係各位のご協力によりまして無事所期の目的を達成し、報告書刊行のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、町民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成13年２月

郡家町教育委員会
教育長　森　本　實　二

例　　言

1、本書は平成12年度に国、県の補助金を得て郡家町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2、調査を実施した遺跡は、鳥取県八頭郡郡家町大字久能寺字狐塚・谷田・棘塚・上沖代・中沖代に所在する久能寺遺跡である。

3、本書における方位はすべて磁北である。

4、本書における遺構記号はつぎのようである。
　Ｔ：トレンチ、ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝状遺構、Ｐ：ピット

5、遺物実測図のスケールは、１／２である。

6、本書の執筆編集は、道谷冨士夫が行なった。

7、発掘調査によって作成された記録類、および出土遺物は郡家町教育委員会に保管されている。

8、発掘調査の体制は、下記の通りである。

発掘調査主体　郡家町教育委員会　教育長　森本實二
調 査 主 任　道谷　冨士夫
事　務　局　教育課長　衣笠　泰博
　　社会教育主任　奥平　　徹
調 査 指 導　鳥取県教育委員会文化課
　　鳥取県埋蔵文化財センター

本　文　目　次

序　　文
例　　言
Ⅰ　発掘調査にいたる経過……（1）
Ⅱ　久能寺遺跡の位置と環境……（2）
Ⅲ　発掘調査の概要……（3）
Ⅳ　小　　結……（12）

挿　図　目　次

第1図　郡家町遺跡分布図……（3）
第2図　調査地位置図……（3）
第3図　試掘トレンチ位置図……（4）
第4図　久能寺遺跡試掘トレンチ土層断面図 …（5・6）
第5図　第1トレンチ平面図……（7）
第6図　第6トレンチ平面図……（8）
第7図　第9トレンチ地山の石……（8）
第8図　第12トレンチ平面・土器出土図……（9）
第9図　第15トレンチ平面図……（9）
第10図　第16トレンチ平面図……（10）
第11図　第18トレンチ平面図……（10）
第12図　出土遺物実測図……（11）

図　版　目　次

図版1　(1)　調査地全景　①　（西より）　(2)　調査地全景　②　（西より）
(3)　第1トレンチ完掘状況　（南より）　(4)　第2トレンチ完掘状況　（北より）
図版2　(1)　第3トレンチ完掘状況　（南より）　(2)　第4トレンチ完掘状況　（南より）
(3)　第5トレンチ完掘状況　（西より）
図版3　(1)　第6トレンチ完掘状況　（東より）　(2)　第9トレンチ完掘状況　（西より）
(3)　第10トレンチ完掘状況　（西より）
図版4　(1)　第11トレンチ完掘状況　（東より）　(2)　第11トレンチ半月形埋土　（南より）
(3)　第12トレンチ完掘状況　（南より）　(4)　第12トレンチ中心部ピット
図版5　(1)　第12トレンチB完掘状況（北より）　(2)　第12トレンチB検出土器群（北より）
(3)　第12トレンチ検出土器　（北より）　(4)　第12トレンチ検出土器　（北より）
図版6　(1)　第13トレンチ完掘状況　（北より）　(2)　第14トレンチ完掘状況　（北より）
(3)　第15トレンチ完掘状況　（北より）
図版7　(1)　第16トレンチ完掘状況　（北より）　(2)　第16トレンチ遺構　（北より）
(3)　第17トレンチ完掘状況　（南より）　(4)　第18トレンチ完掘状況　（東より）
図版8　(1)　土　器　NO1　(2)　土　器　NO2
(3)　土　器　NO3　(4)　土　器　NO4
図版9　(1)　土　器　NO5　(2)　土　器　NO6
(3)　土　器　NO7　(4)　土　器　NO8—1
図版10　(1)　土　器　NO8—2　(2)　土　器　NO10
(3)　土　器　NO11—1　(4)　土　器　NO11—2

Ⅰ　発掘調査にいたる経過

久能寺遺跡は、町の北側を西流する私都川と南側を西流する八東川の中間点に位置する郡家町大字久能寺字狐塚・谷田・練塚・上沖代・中沖代に所在し、久能寺古墳群・御建山古墳群の総称である。

県立八頭高等学校の東側、若桜鉄道とＪＲ因美線両鉄道に挟まれた約30,000㎡の田園地帯が本年度から来年度にかけて、八頭高等学校のサッカー場、ホッケー場として整備される事となった。

建設地は、郡家沢田山古墳群・御建山古墳群・久能寺古墳群・万代寺遺跡・八上郡衙跡等、まわりを遺跡群に囲まれた地帯であるため遺跡を確認する作業が必要となった。

郡家町教育委員会では、工事予定地全域にわたって試掘調査を行ない遺構の確認作業を実施することとし、平成12年10月より現地作業に着手した。試掘調査は平成12年10月17日から現地での調査準備を開始、トレンチ掘削の作業に入った。

県文化課との事前の話し合いにより、トレンチ18ヵ所（１×５ｍ～２×10ｍ）を予定していたが７・８トレンチは湿地帯のため調査せず、16ヵ所のトレンチ掘削を実施した。その結果、住居跡２基、ピット状の遺構２ヵ所が確認された。

実測・写真撮影等の作業を経て12月23日現地作業終了、報告書作成作業は平成13年１月５日より行ない２月末日をもって終了した。

調査に際しては次の方々の御協力を得た。記して謝意を表したいと思う。

調査協力　鳥取県教育委員会事務局　文化課
　　鳥取県埋蔵文化財センター

作業協力　福本　司、大野昌之、林　　賢、福本弘江、大野美佐栄、安部孝子、和田政子
　　堀　安子

Ⅱ　久能寺遺跡の位置と環境

地理的・歴史的環境

町内には二つの河川、私都川・八東川が流れ町内西部に広がる国中平野を形成している。私都川は、町東端に立地する扇ノ山に源を発し流長27km、町内を西流している八東川は若桜町に源をなして町南部を西流する。そして両河川は町内西端で合流しさらにその下流で千代川に合流し日本海に注いでいる。

今回の調査地はこの国中平野の東南端に位置し、ＪＲ郡家駅より西方約800m、郡家駅を基点として八頭高等学校の南側を通る若桜鉄道、北側を通るＪＲ因美線に挟まれた郡家町久能寺字氣塚、谷田、棘塚、上沖代、中沖代に所在し、畑・水田に利用されていた約30,000㎡の土地である。また、沢田山古墳群の所在地から北西に約400m、久能寺古墳群の所在地からは北へ約600m、御建山古墳群の所在地からは北東へ約200m、八上郡衙跡・万代寺遺跡からは東方向へ約700mと、いずれも１km以内に遺跡が存在している。

郡家町の歴史的環境は遺跡の密集度の高さで知られている。

縄文時代後期の遺跡として、町南部八東川下流域の北岸に位置する西御門遺跡・私都川と八東川に挟まれた段丘上に立地する万代寺遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡としては万代寺遺跡の木棺墓群、下坂より出土した銅鐸の存在が知られているが、これらの遺跡は段丘上あるいは丘陵斜面に展開しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地を生産基盤とした農業集落の広がりを推察することができる。

古墳時代中期後半以降になると私都川流域を中心として、丘陵斜面に古墳の数が増加する。

久能寺の北方、八頭高等学校の東側丘陵に墳輪を囲繞させた御建山古墳群、五世紀末葉から６世紀初頭ごろの盟主墳と考えられる稲荷古墳群、少し下った時期の盟主墳といわれる寺山古墳・宮谷１号墳は、いずれも前方後円墳である。またこの時期になると、私都川中・下流域を望む丘陵斜面には径10m前後の横穴式石室を主体とした群集墳、石棺を主体とした群集墳が造られている。これらのもっとも密集した地域は、郡家町北東部の山田地区、北西部の霊石山山麓、南部の久能寺地域である。

これらの地域は寺院跡や官衙跡ならびにこれらに関連の深い遺跡もみられる地域である。霊石山山麓では白鳳時代後期の法起寺式の伽藍配置をもつ土師百井廃寺の存在が知られており、万代寺遺跡では、八上郡郡衙跡と考えられている掘立柱建物群を検出している。

また、土師百井廃寺の瓦片・鴟尾片、郡衙跡から出土した杯・壺・円面硯等の遺物を産出した古窯群も一般によく知られている。

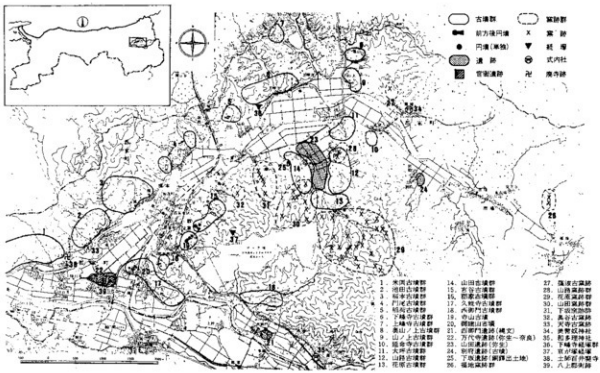
久能寺遺跡の概要

この地は、御建山遺跡が存在した尾根がなだらかな裾から平地へ移る境界点であるとともに前述の通り周囲を遺跡に囲まれた土地でもある。

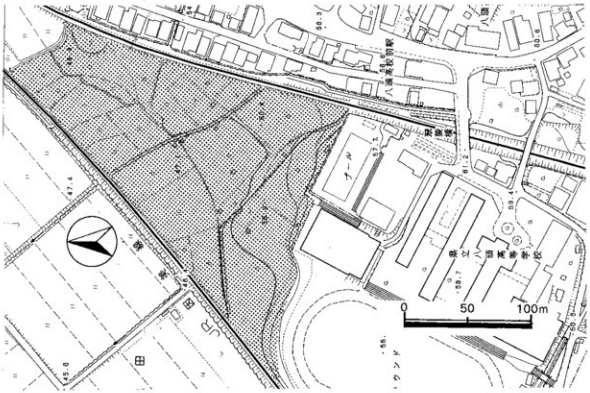
大正15年３月15日認可された「県立鳥取女子師範学校・併設高等女学校」（現八頭高等学校）の校舎建築・運動場建設のため（当時は、オタテの学校と呼んでいた）、また、昭和初期ごろ施設された２本の鉄道建設等々により、相当の土地変動が意図的に行なわれたところでもある。

調査地には、３っつの高台と３っつの谷が存在しているようにみうけられる。字谷田に存在する中の谷から見ると、棘塚側の高台は約２m、狐塚側の高台は約３mの高度差が認められる。

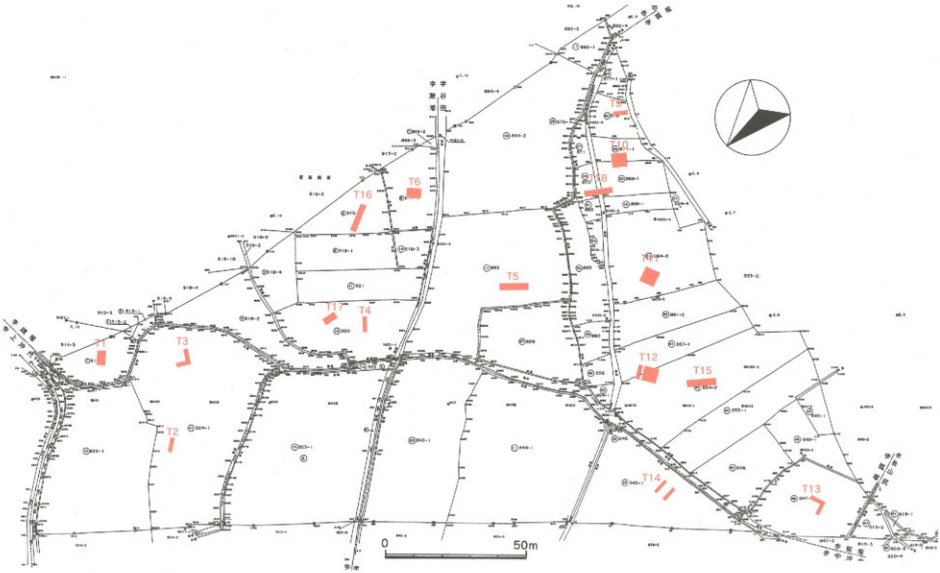
いずれも農耕に利用されていた土地である。



第１図　郡家町遺跡分布図

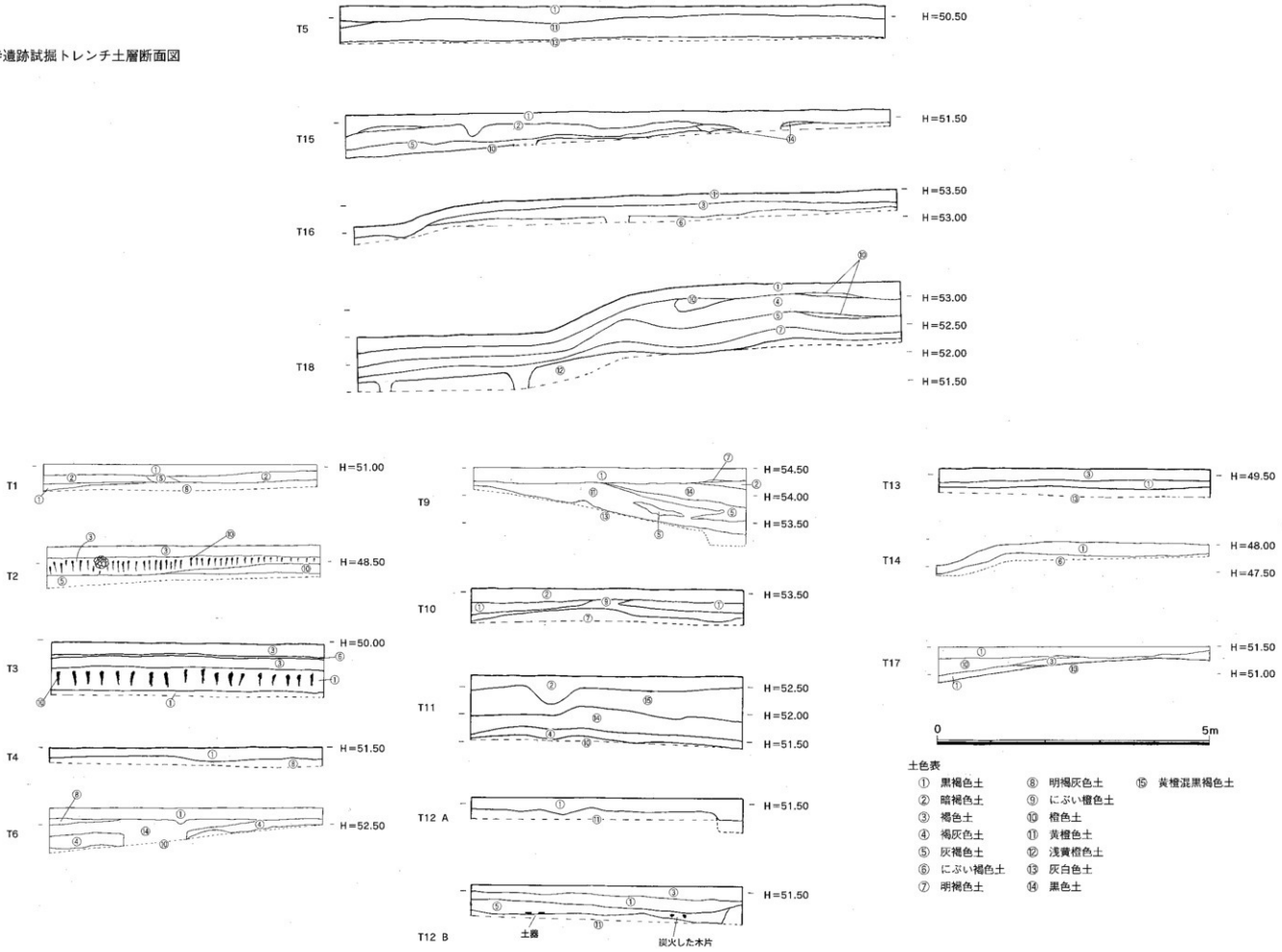


第２図　調査位置図



第３図　試掘トレンチ位置図

第４図
久能寺遺跡試掘トレンチ土層断面図



Ⅲ　発掘調査の概要

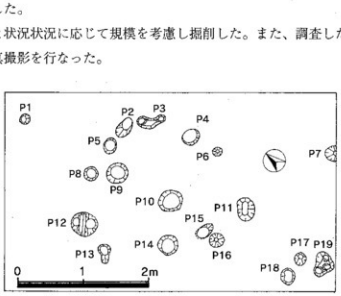
調査の方法と経過

今回試掘調査の対象となったのは、八頭高等学校サッカー・ホッケー場予定地としての約30,000㎡の土地である。

試掘調査は高台を主体に18本のトレンチを設定し作業を進めた。然し、最初予定していた７・８トレンチは湿地地帯であり掘削困難なため、カットした。

トレンチは１×５ｍ～５×５ｍ～２×10ｍと状況状況に応じて規模を考慮し掘削した。また、調査したトレンチについては平面図・土層断面図・写真撮影を行なった。

トレンチ調査の概要



第５図　第１トレンチ平面図

第１トレンチ（第３図・第５図）

調査地最東部若桜鉄道に隣接する高台。

Ｈ＝48.56ｍに掘った３×５ｍのトレンチである。遺物は検出せず平面図（第５図）で見られるピットを検出した。

ピットの径はさまざまであるが、約20cm～40cm内外、地山面からの深さは約20cm内外である。

トレンチの西方側地山面が東側に比してかなり下がっており埋立地の形跡あり。

第２トレンチ（第３図・第４図）

調査地のいちばん低地に掘った１×５ｍのトレンチである。0.5ｍ掘ったあたりから水がジワジワと湧きだしてくる。地表面より0.3ｍのあたりに排水をするために造られた暗渠排水の施設跡がみられ、このあたりはかなりの湿田であったことが窺える。

表土から２番目の層「にぶい褐色土」層に黄橙色土が垂れ下ったように混在している。地山は、細砂混じりの「褐灰色土層」である。遺物は検出しなかった。

第３トレンチ（第３図・第４図）

第２トレンチより約30ｍ南東側へ掘ったトレンチである。

Ｌ字状に１×５ｍ・１×５ｍと掘り進めたが第２トレンチと同様、0.5ｍの辺りで水が湧きだし暗渠排水に使用したと思われる孟宗竹等が出土した。

地表面下0.5～0.6ｍにかけて、細粒の黒褐色土層中に水が垂れたような明黄褐色土が混在している。遺物は検出しなかった。

第４トレンチ（第３図・第４図）

調査地のほぼ中心部にあたる位置に掘った１×５ｍのトレンチである。

地山層までが非常に浅く、0.3ｍで「黄白色土」の地山に達する。

雨が降ると長い間水が浸透しないで残っている。中間高台の辺りを、削平し埋めだした土地ではないか

と考えられる。遺物は検出しなかった。

第５トレンチ（第３図・第４図）

調査地谷田地区（湿地帯）に掘削した２×10mのトレンチである。

黒褐色土（耕作土）約0.2m、次層は黄橙色土約0.4m、次の層は黒褐色土が混入した粘土の灰白色土層である。谷間であるため周囲より埋め土が相当運ばれたものと考えられる。地表面から約0.8mのあたりで水が湧きだしてくる。

遺物は、土師器片１個を検出した。

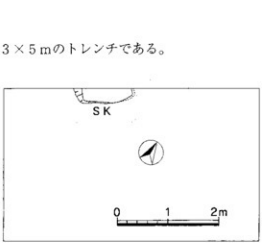
第６トレンチ（第３図・第４図・第６図）

３ヵ所あるうち中間の高台の谷田寄りに掘った３×５mのトレンチである。

５mで地表面から地山迄の計測によると、東寄り0.3mに対して谷田寄りは0.8mと0.5mの高度差が見られる。（第４図）これは、相当の削り出しによって水平を保ったものと推測される。

北西寄りに土坑（縦径約1.1m深さ約0.3m）１を検出したが、何に使用したのか不明である。

遺物は検出しなかった。



第６図　第６トレンチ平面図

第７・８トレンチ（第３図）

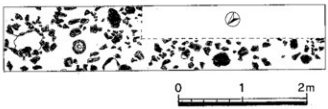
最初は予定していたが、予定地が湿地帯のため割愛した。

第９トレンチ（第３図・第４図・第７図）

調査地南西部。八頭高等学校のプール寄り高台に掘った１×５mのトレンチである。

八頭校側は地表面下約0.4mで地山に達するが谷田側は地山まで約1.4mであり、急激な地山の落ち込みがみられる。

地山面には大小様々な石が見られ、（第７図）石は山・川石が混在しているが山石が多く、地肌は灰白色を呈している。



第７図　第９トレンチ平面図（地山の石）

遺構・遺物ともに検出しなかった。

第10トレンチ（第３図・第４図）

第９トレンチ北西15mに掘った５×５mのトレンチである。

このトレンチを取り巻く、第９・11・18トレンチはいずれも北西側が谷田に向かって落ち込んでいるのに対して、第10トレンチはどの地点も地表面より約0.6m内外で地山に達する。また土層もそれほど変化がなく、水平を保っているといえるようだ。遺構・遺物ともに検出しなかった。

第11トレンチ（第３図）

第10トレンチ北西約40mに掘った５×５mのトレンチである。

このあたりはかなり撹拌された土地と推察される。なぜなら、暗褐色土・黒褐色土・黄橙色土が入り混

じった層があることである。

地山の黄橙色土層に達するまでが、地表面より約1.2mである。

遺物は９点検出した。いずれも土師器であり色は「にぶい橙色」。破砕面がかなり摩耗している。９点の中には甕の口縁部１点が含まれている。（第12―②図）

第12トレンチ（第３図・第４図・第８図）

土器片70点余り、竪穴住居跡１棟が検出されたトレンチである。

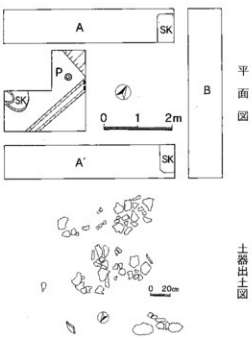
先ず５×５ｍの区画を決め区画の両側に、１×５ｍのトレンチＡ・Ａ′を掘った。

どちらのトレンチにも東側に曲線状の落ち込みが確認されたため更に東側に１×５ｍのトレンチＢを設定し試掘を試みた。

トレンチＢは約0.6～0.7ｍで地山に達し、土器片は地表面下0.6ｍで検出した。また、0.6ｍのあたりで焼土を確認し、木炭を採取した。

土器片20数点を復元したがかなり厚みのあるものであり、甕か壺の一部分ではないかと推測され、煮炊き用に供されたと思われる煤が付着している。

同位置から出土した土器片のなかに、朱のかかった椀の口縁部が一片検出されている。



第８図　第12トレンチ平面・土器出土図

第13トレンチ（第３図・第４図）

調査地のいちばん西側に掘った１×５ｍ・１×５ｍ、Ｌ字形のトレンチである。

地山は砂礫状であり、水分を含んでいる。

遺物は一点、調査地のなかでただ一つの須恵器片であった。

第14トレンチ（第３図・第４図）

調査地内で標高が最低の地点に設定した１×５ｍのトレンチである。

表土下0.2ｍで地山に達する。地山の色は「にぶい褐色」である。

遺物は土師器の小片である。

第15トレンチ（第３図・第４図・第９図）

住居跡と推定される第12トレンチより約10ｍ、南西方向に掘った２×10ｍのトレンチである。

ここでは遺物17個、ピット７個、帯状の土坑２本を検出した。

第９図　第15トレンチ平面図

帯状の土坑は地山面より最深部分0.22ｍ

y最浅部分、0.08ｍであり、以前畑であったところから、肥料穴の可能性が大である。

ピットのなかには柿の木の根跡と考えられるものも含まれている。

地山のレベルは、八東高校寄り地表面下約0.8ｍ、第12トレンチ寄り約0.2ｍであり、10ｍの長さに対し

て0.6m下降している。このことから、八頭高校寄りは谷であったことが推測される。また、土層断面図に見られるように黒褐色土が地山にたっしているところもあり、数度の掘削・削平の行なわれたことが推察される。

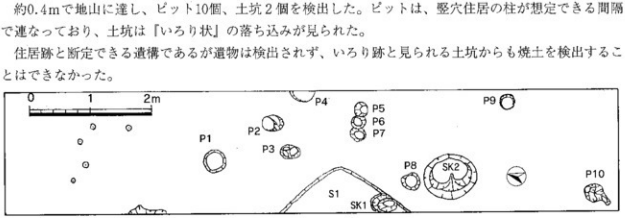
遺物はいずれも土師器であり、バラバラの個体であった。中に、高台の一部分（直径約７cmと推定）(第12―⑥)、リング状の器具の一部分（第12―⑦）外周の直径約12cmぐらいと推定されるもので両面には稲穂を押しつけたような紋様がつけられている。

第16トレンチ（第３図・第４図・第10図）

調査地中間の高台第６トレンチの北側に掘削した２×５mのトレンチである。

約0.4mで地山に達し、ピット10個、土坑２個を検出した。ピットは、竪穴住居の柱が想定できる間隔で連なっており、土坑は『いろり状』の落ち込みが見られた。

住居跡と断定できる遺構であるが遺物は検出されず、いろり跡と見られる土坑からも焼土を検出することはできなかった。



第10図　第16トレンチ平面図

第17トレンチ（第３図・第４図）

第４トレンチの北東側に掘った２×５mのトレンチである。

第16トレンチより１段下がった土地であり、第16トレンチのある高台を削り埋めだしたものと推測される。

土層図を見ると北側の地山がかなり落ち込んでおり耕作土である黒褐色土層の下に地山層にみられる橙色土層が入り込みその下層に褐色土の層が有るという変則的な層になっている。このあたりも、掘削・削平・埋めだしが数回行なわれたと考えられる。

遺構・遺物共に検出されなかった。

第18トレンチ（第３図・第４図・第11図）

第10トレンチの北約10m。段差約0.8mある２枚の畑の中間に農道を挟んで掘った２×10mのトレンチである。

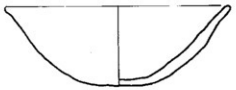
第11図　第18トレンチ平面図

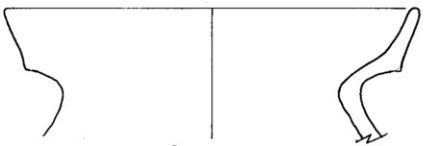
土層を見るとこのあたりも削平・埋めだしが行なわれたと考えられ、地山に見られる黄橙色土が土層の上部に混在している。

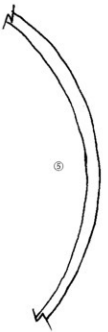
地表面から地山層まではかなり深く約１m内外である。

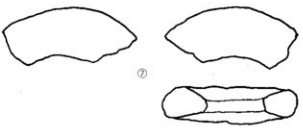
表土層は0.3m内外であるが粒子が非常に小さく、黒褐色の火山灰土を思わせる土である。

遺構としては、直径1.1m、短径0.8m、深さ0.27mの土坑１個。遺物は土師器片２個が検出された。



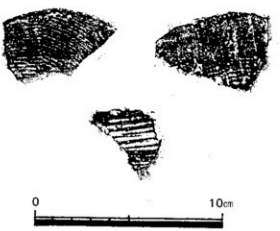






他の土器の拓本

⑦ の拓本



第12図　出土遺物実測図

Ⅳ 小　　結

今回の試掘調査で得られた所見を以下にまとめ、若干の検討を加えてみた。

調査地は地理的環境でも記したが、沢田山古墳群・御建山古墳群・久能寺古墳群・万代寺遺跡・（弥生～奈良）八上郡郡衙跡等に囲まれたところである。特に、八頭高等学校（旧　県立女子師範学校）が創られた当時このあたりは、円錐小丘状の埴輪に囲まれた古墳が多数存在したといわれている。

そのことを考慮して試掘トレンチが設定された。

トレンチ調査により、住居跡と推定される遺構が２ヵ所、ピット状遺構２ヵ所、土坑状遺構１ヵ所が検出されるに至った。

遺物は118個体検出されているが、復元可能なものはほとんどなく、トレンチ12で出土した土器を除いて八頭高等学校所在地の削平・高台の削平等々によって押し出されたものと推察される。内容をみると、須恵器片１個体、土師器片116個体、木炭１個体である。

検出した土器類は、古墳時代の終末ごろ６世紀後半から７世紀にかけてのものではないかと考えられる。

今回の調査では、上記のような所見が得られ所期の目的は十分達成されたものとおもわれる。

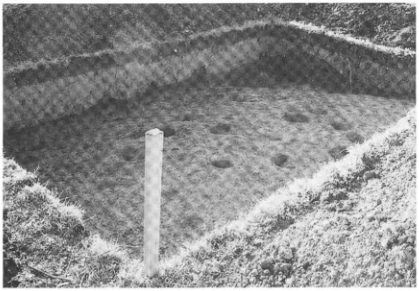
平成13年度、当該地の本調査が実施されるということである。これによって、本調査地の実体が明らかにされるものと思っている。

調査に際し、発掘調査から報告書作成に至るまで多くの方々のご協力・ご教示を得た。記して謝辞に代えたい。

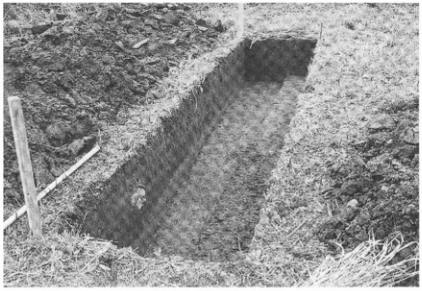
図　　版

（1）調査地全景①

（2）調査地全景②



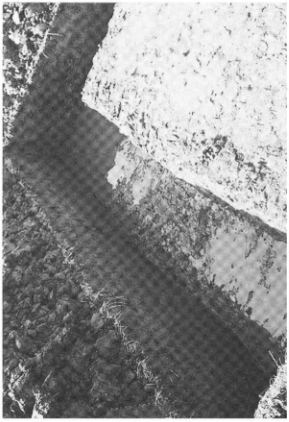
（3）第1トレンチ完掘状況



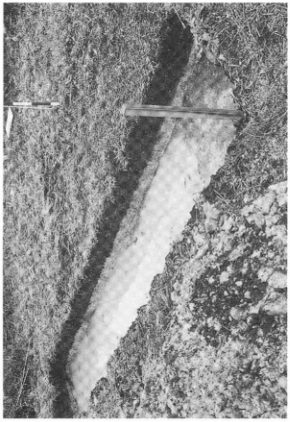
（4）第2トレンチ完掘状況

図版1

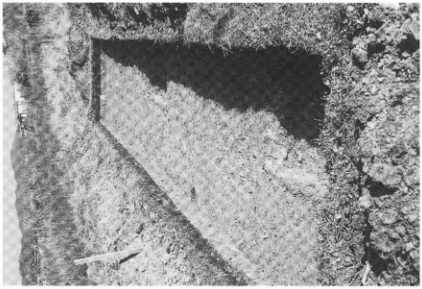
図版２



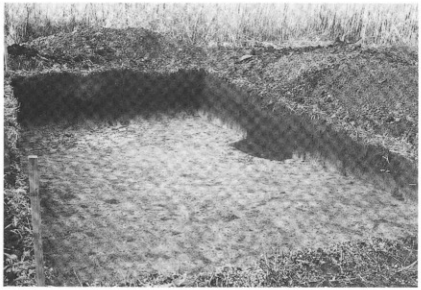
（１）第３トレンチ完掘状況



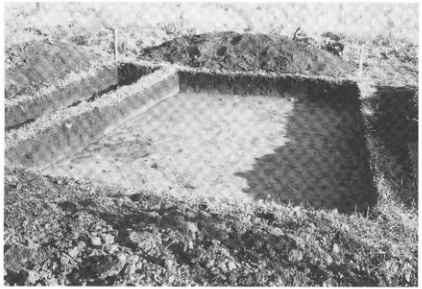
（２）第４トレンチ完掘状況



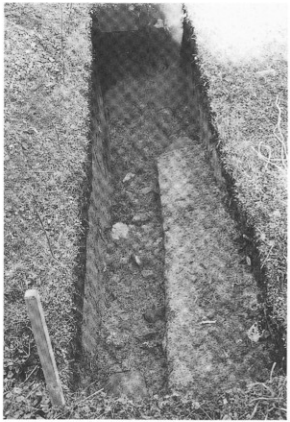
（３）第５トレンチ完掘状況



（1）第６トレンチ完掘状況

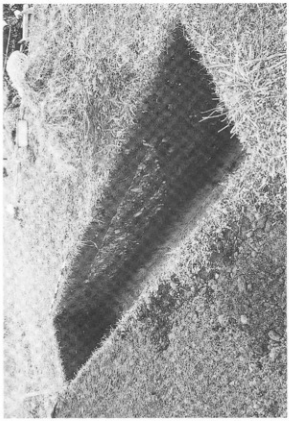


（3）第10トレンチ完掘状況

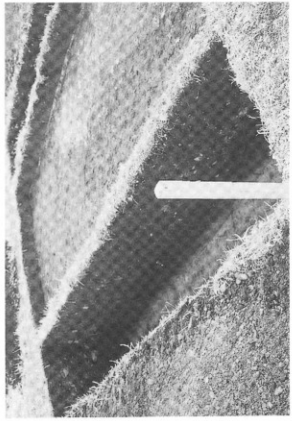


（2）第９トレンチ完掘状況

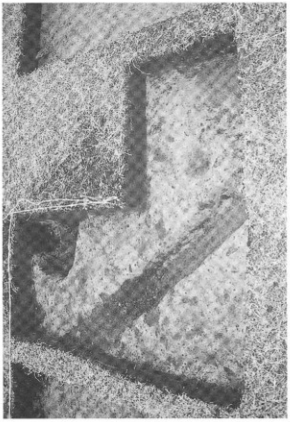
図版 4



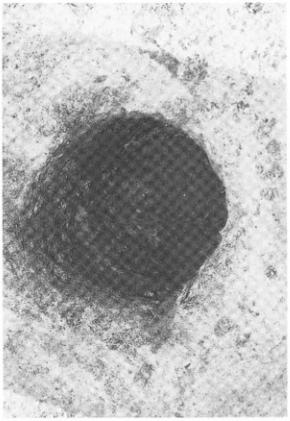
（1）第11トレンチ完掘状況



（2）第11トレンチ半月形遺土

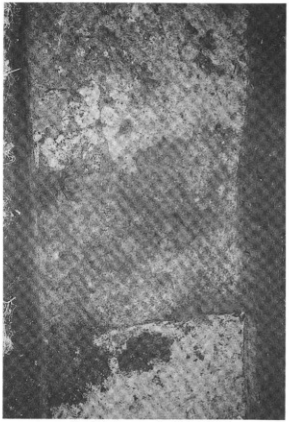


（3）第12トレンチ中心部

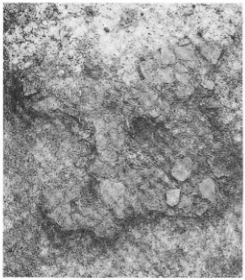


（4）第12トレンチ中心部ピット

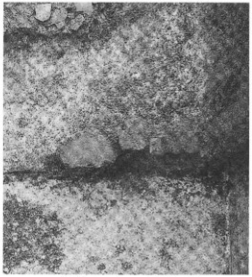
（1）第12トレンチB完掘状況



（2）第12トレンチB検出土器群



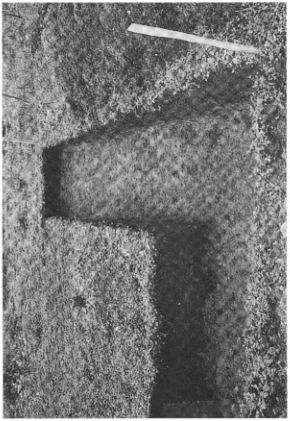
（3）第12トレンチ検出土器



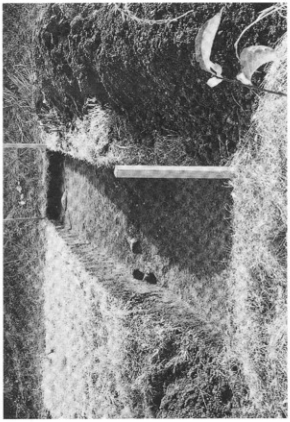
（4）第12トレンチ検出土器

図版5

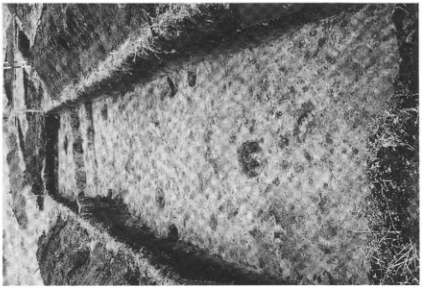
図版 6



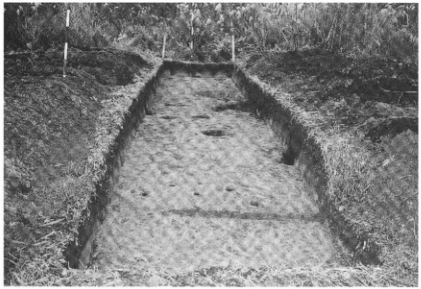
（1）第13トレンチ完掘状況



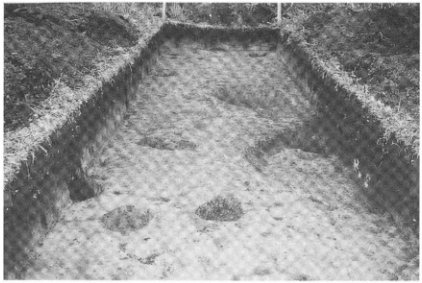
（2）第14トレンチ完掘状況



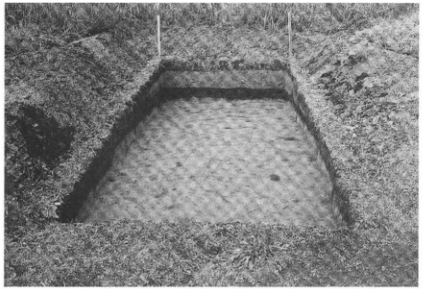
（3）第15トレンチ完掘状況



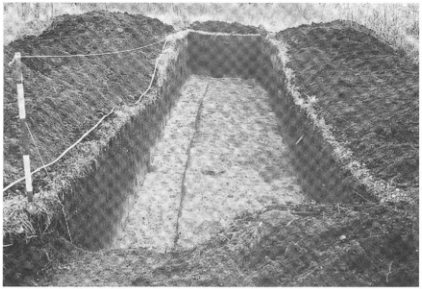
（1）第16トレンチ完掘状況



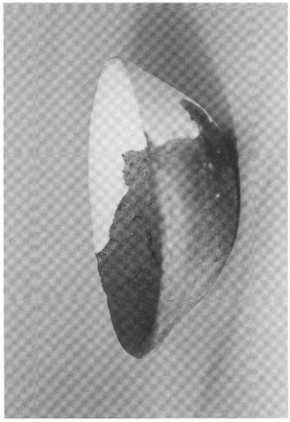
（2）第16トレンチ遺構



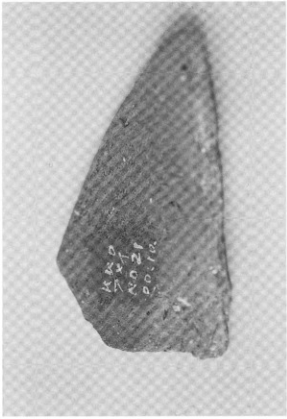
（3）第17トレンチ完掘状況



（4）第18トレンチ完掘状況

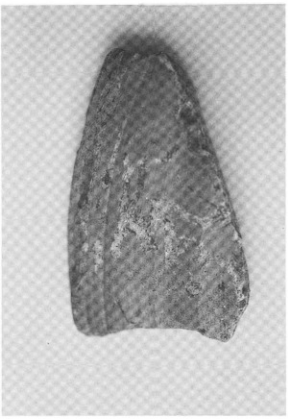


(1) 土器 No.1



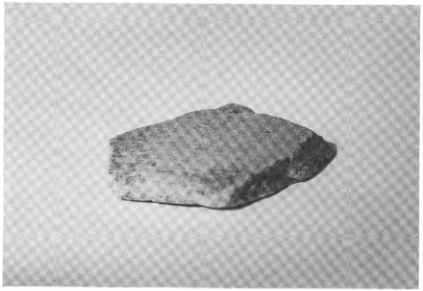
(2) 土器 No.2

(3) 土器 No.3

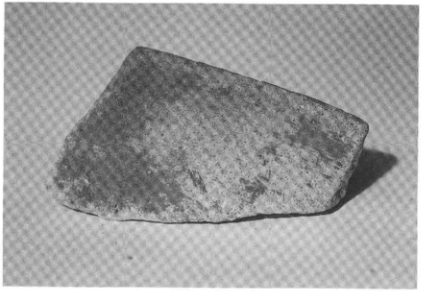


(4) 土器 No.4

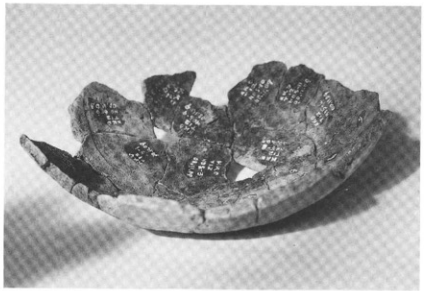
(1) 土 器 No.5



(2) 土 器 No.6

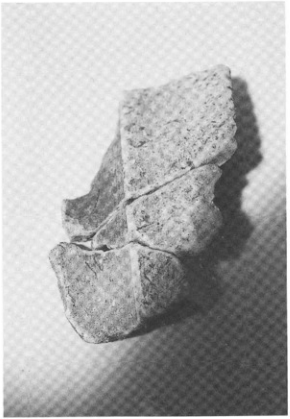


(3) 土 器 No.7

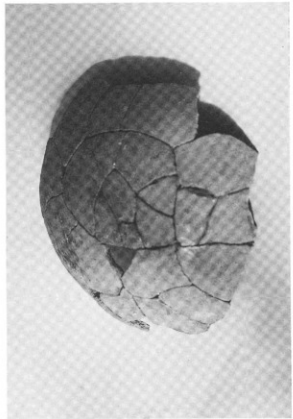


(4) 土 器 No.8－1

図版 9



(1) 土器 No.8－2



(2) 土器 No.10

(3) 土器 No.11－1

(4) 土器 No.11－2

久 能 寺 遺 跡
（試掘調査）

平成13年２月　印刷・発行

発行　郡家町教育委員会
印刷　中央印刷株式会社